

## 産地訪問 伊予・新しい紙の町へ

愛媛県東端、四国中央市（旧川之江市・伊予三島市）を含む旧宇摩郡一帯は、明治期に始まった三極の改良半紙によって、県内最大の和紙産地となっていった。「紙のまち」として発展してきた同市の産業は全国トップのパルプ・紙産業を抜きに語れないが、手漉き工房も2軒が存続している。今回訪ねた(有)丸あ製紙所では、昭和30年代に機械化を選択しながらも、雁皮や三極を原料とする高級半紙を作り続けている。同市には紙の情報交流拠点「紙のまち資料館」、研究拠点として「愛媛県産業技術研究所 紙産業技術センター」がある。

瀬戸内海に面し、製紙工場の煙突が立つ四国中央市。背後には四国山地が連なる。



製紙を含む一帯の工業用水は、四国山地を水源とする銅山川水系にある3つのダム湖より。写真は金砂湖 県立自然公園。



40年余り続くイベント「四国中央 紙まつり」、会場は街の商店街一帯。